

This is a self-archived version of an original article. This version may differ from the original in pagination and typographic details.

Author(s): Korhonen, Pekka

Title: [Thinking about the Ukraine war from the perspective of Carl Schmitt's Nomos]

Year: 2023

Version: Published version

Copyright: © 2023 Japan Association of Business Management Law

Rights: In Copyright

Rights url: <http://rightsstatements.org/page/InC/1.0/?language=en>

Please cite the original version:

Korhonen, P. (2023). [Thinking about the Ukraine war from the perspective of Carl Schmitt's Nomos]. *Keiei jitsumuho kenkyu* = , 25, 15-22.

https://doi.org/10.57384/keiejitsumuhokenkyu.25.0_15

カール・シュミットのノモスの視点から ウクライナ戦争を考える

ユフスクラ大学名誉教授
ペッカ コルホネン

2014年に始まり、2022年に激化したウクライナ戦争は、ヨーロッパの局所的なものではあるが、その政治的・経済的な影響はより多くの領土に拡大し、世界システムレベルで大きな変化を与える問題である。冷戦時代に同盟として存在した「西側」を目醒めさせ、NATO 同盟の内部の協力関係を強化し、さらに日本、韓国、オーストラリア、ニュージーランドの関係をますます緊密にしている。非難の主な焦点はもちろんロシアである。ベラルーシ、シリア、北朝鮮を除いて、ロシアに対して支持を表明する国はほとんどなく、他の多くの国が遠くから戦争を「観戦スポーツ」*1として観察している。しかし同時に多くの国の人々は軍事紛争の脅威への認識が高まり、エネルギー価格の上昇、世界的な物流における危機により、戦時中の心理状態に移行している面もある。

ロシアの攻撃とその継続はその結果から見ればまったく無意味だが、ロシアの視点はどのような意味があるのか。以下は、カール・シュミットの法的小よび政治的思想の助けを借りて今の状況を理解する試みである。彼は現在のプロセスのいくつかのニュアンスを説明することに適していると思われる。

もちろん、公の場で飛びかっている説明にはいくつかある。西洋では、ほとんどの非難はロシアの指導者に向けられており、とりわけウラジーミル・プーチン大統領個人に責任があるとしている。ロシアの攻撃は、ウクライナ人だけでなく、中東やアフリカでのエネルギー価格の上昇や飢餓への懸念という点で、世界中に多くの苦しみを引き起こしている。主流となっている論評では、プーチン大統領は常軌を逸しているか、病気か、悪の首謀者かというような意見が出ている。これはほとんどの公共メディアおよび西側の政府の一般的な方針だが、ロシアの活動に対する説明としては十分ではない。

ロシアの行動を理解する声もある。学問の世界では、特に現実主義学派のアメリカ

*1 Shapiro, Michael (1989) Representing world politics: The sport/war intertext. In: Der Derian, James and Shapiro, Michael (eds) International/Intertextual Relations: Postmodern Readings of World Politics. Lexington: Lexington Books, pp. 69–96.

カ代表者の間で見られる。そこでは主犯はロシアではなく、国家安全保障に対する正当なロシアの懸念を無視した NATO の東方拡大という形をとった、アメリカ帝国主義である。この議論は、ヘンリー・キッシンジャー^{*2}、ジョン・ミアシャイマー^{*3}、テッド・ゲーレン・カーペンター^{*4}、アミタフ・アチャリヤ^{*5}、タッカー・カールソン^{*6}、ジェフリー・サックス^{*7}などの著名人によって代表される。これは、ロシア自身、中国、北朝鮮、およびその他の国の政府の主要な主張でもある。この議論の問題はエージェンシーである。ヤン・スモレンスキとヤン・デウトキエウィズが正しく指摘しているように、NATO の東方拡大における実際の機関は、ロシアと国境を接するか、それに近い国々によって実施されてきた。それらの国々は EU と NATO の両方への加盟を積極的に模索している。彼らにとっては、「ウェストスプレーニング」と呼ぶ現実主義的なアメリカの議論は、ロシアの近隣諸国の正当な安全保障上の懸念を無視している^{*8}。フィンランドとスウェーデンの最近の NATO 加盟申請はその好例である。それは、米国によるいかなる扇動もなく、完全にこれらの国での国内の議論によって開始された^{*9}。ロシアは潜在的で深刻な安

^{*2} Kissinger, Henry (2014) Henry Kissinger: To settle the Ukraine crisis, start at the end, *The Washington Post*, March 5, 2014, https://www.washingtonpost.com/opinions/henry-kissinger-to-settle-the-ukraine-crisis-start-at-the-end/2014/03/05/46dad868-a496-11e3-8466-d34c451760b9_story.html

^{*3} Mearsheimer, John (2022) Why John Mearsheimer Blames the U.S. for the Crisis in Ukraine, *The New Yorker*, March 1, 2022, <https://www.newyorker.com/news/q-and-a/why-john-mearsheimer-blames-the-us-for-the-crisis-in-ukraine>

^{*4} Carpenter, Ted Galen (2022) Many predicted Nato expansion would lead to war. Those warnings were ignored, *The Guardian* 28 February 2022, https://www.theguardian.com/commentisfree/2022/feb/28/nato-expansion-war-russia-ukraine?utm_term=Autofeed&CMP=twt_gu&utm_medium&utm_source=Twitter#Echobox=1646074880

^{*5} Acharya, Amitav (2022) Europe just became the world's most dangerous place, *East Asia Forum*, 28 March 2022, <https://www.eastasiaforum.org/2022/03/21/europe-just-became-the-worlds-most-dangerous-place/>

^{*6} Cole, Brendan (2022) Tucker Carlson Backs Russia, Compares Ukraine Joining NATO With China Controlling Mexico, *Newsweek* 19 January 2022, <https://www.newsweek.com/russia-ukraine-fox-news-tucker-carlson-putin-nato-china-1670699>

^{*7} Sachs, Jeffrey (2022) The Great Game in Ukraine is Spinning Out of Control, *jeffsachs.org*, 28 September 2022, <https://www.jeffsachs.org/newspaper-articles/d2hlnp24c7hyewetypd6rjgfesszm4>

^{*8} Smoleński, Jan & Dutkiewicz, Jan (2022) The American Pundits Who Can't Resist "Westsplaining" Ukraine, *The New Republic*, 4 March 2022, <https://newrepublic.com/article/165603/carlson-russia-ukraine-imperialism-nato>

^{*9} Isoaho, Eemeli & Masuhr, Niklas and Merz, Fabien (2022) Finland's NATO accession,

全保障上の脅威と見なされていた。

欧州連合 EU は、国際協力と経済的相互依存という偉大なゲームの終わりに驚いている。過去 30 年間の優れた「戦略的多国間主義」の政策を新しい状況に適応させようとしているが、そのプロセスはかなり困難である*¹⁰。ロシアのウクライナ侵攻以前の欧州連合内の心理的な考え方は、フランシス・フクヤマの 1989 年の記事「歴史の終わり？」によっておそらく最もよく例証されている。冷戦後に大きな政治的および軍事的紛争は終わったとされる*¹¹。この論文はもはや学界ではほとんど読まれておらず、フクヤマ自身も議論から距離を置いているが*¹²、多くのヨーロッパの国々のロシアとのエネルギー連携は、まさにフクヤマの指摘する論理で組織されていた。その結果、彼らは現在、エネルギー危機と深刻な景気後退に直面している。戦車が動かず、軍用機も十分に飛行していない。これは、ほとんどのロシアの隣国でさえ、軍事能力の維持が 1 世代にもわたって無視されてきたためである。フィンランドは、ほとんどの種類の不測の事態に備えて体系的に準備されている唯一の EU 加盟国のようなものである*¹³。ヨーロッパでは、ロシアの裏切りという認識が強いが、それをどのように説明するかは不明である。今の状況はまったく無意味に見える。

これらすべての異なる要素を合理的に捉えなおすことは困難である。以下では、状況の概要を説明するために、カール・シュミットの考えを使用する。これは合理的で非感情的なツールである。もちろん、感情はすべての人間に存在するが、国家行動をうまく説明することはできない。シュミットがロシアに影響を与えたという事ではなく*¹⁴、ただロシアはシュミットが説明した古典的なヨーロッパ式の地理

CSS Analyses in Security Policy, No. 310, 7 September 2022, <https://css.ethz.ch/en/center/CSS-news/2022/09/finlands-nato-accession.html>

*¹⁰ Helwig, Niklas (2022) The EU's Strategic Multilateralism. Global Engagement in an Era of Great-Power Conflict, FIIA Briefing Paper 347, 30 August 2022, <https://www.fiia.fi/en/publication/the-eus-strategic-multilateralism>

*¹¹ Fukuyama, Francis (1989) The End of History?, *The National Interest* No. 16, pp. 3-18.

*¹² Menand, Louis (2018) Francis Fukuyama postpones the End of History, *The New Yorker*, 27 August 2018, <https://www.newyorker.com/magazine/2018/09/03/francis-fukuyama-postpones-the-end-of-history>

*¹³ Kivinen, Timo (2022) Finns are ready to fight any Russian attack, says armed forces chief, *The Guardian*, 22 June 2022, <https://www.theguardian.com/world/2022/jun/22/finns-are-ready-to-fight-any-russian-attack-says-its-armed-forces-chief>

*¹⁴ Auer, Stefan (2015) Carl Schmitt in the Kremlin: the Ukraine crisis and the return of geopolitics, *International Affairs* 91: 5, pp. 953-968.

的な活動を現在に行っているという解釈である。その点で、特にヨーロッパのノモスの概念に関する彼の分析は、ロシアの現在の行動の歴史的な意味、西ヨーロッパの反応の弱さ、および米国が果たしている実際の役割を明らかにしている。シュミットは法律学者であり、彼の概念は状況に関する法的観点を維持するのに役立つ。ロシアの行動の法的枠組みもここでは重視される。

ロシアは、国連憲章第 2 条で具体的に禁止されているウクライナの領土保全を侵害し、政治的独立を侵害しようとしただけでなく、国連憲章の精神全般も侵害した^{*15}。ロシアが違反したもう 1 つの重要な国際法の項目は、いわゆる ブダペスト覚書である。1994 年に、ロシア、英国と米国がベラルーシ、カザフスタン、ウクライナの各国の安全を保証する同一の覚書をそれぞれと交わした。引き換えに 3 国は、ソ連崩壊後に崩壊時に自国の領土に放棄されていた核兵器をロシアに譲渡した。ウクライナに関する覚書に、ロシアは「ウクライナの独立と主権および既存の国境」を尊重することを約束した。さらに、自国の領土が攻撃されない限り、ウクライナに対する経済的強制と核兵器の使用を控えることを約束した^{*16}。ロシアが 2014 年以来、その文言と精神に繰り返し違反してきたため、覚書の法的地位は現在かなりあいまいだが、署名者による覚書を無効にする明確な宣言もない。

ブダペスト覚書は、ソ連の歴史から見れば、ウクライナがロシアの勢力圏にとどまっていることを根拠としていた。これは、ロシアが 1997 年にウクライナと友好、協力、およびパートナーシップに関する条約に署名したことによって証明されている^{*17}。イエフゲニー・ロシュチンが示しているように、この種の友好条約は、歴史的にはソビエト連邦の外交政策の常套手段だった。そして、英国や米国などの他の大国の、小国、或いは征服された部族に対して外交政策の一部でもあった。そ

^{*15} United Nations (1945) Charter of the United Nations and Statute of the International Court of Justice, https://popp.undp.org/_layouts/15/WopiFrame.aspx?sourcedoc=/UNDP_POPP_DOCUMENT_LIBRARY/Public/Charter%20of%20the%20United%20Nations.pdf&action=default&utm_source=EN&utm_medium=GSR&utm_content=US_UNDP_PaidSearch_Brand_English&utm_campaign=CENTRAL&c_src=CENTRAL&c_src2=GSR&gclid=EAIaIQobChMIpL-3YPL-gIVzwCiAx3o0Q1XEAAAYASAAEGKsQ_D_BwE

^{*16} Joint Declaration of the Leaders of Ukraine, Russia, the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland, and the United States of America (1994). <https://documents-dds-ny.un.org/doc/UNDOC/GEN/G94/652/92/PDF/G9465292.pdf?OpenElement>

^{*17} Ukraine and Russian Federation (1997) Treaty on Friendship, Cooperation, and Partnership between Ukraine and the Russian Federation, <https://treaties.un.org/doc/Publication/UNTS/Volume%203007/v3007.pdf>

れらは丁寧な外交用語をまもっていたが、実際には、影響範囲を確立するための一形態であった。大国と小国との間に不平等な関係を表す条約である*18。ロシアは、1997年にウクライナとのこの歴史的な法的慣行を単純に継続することで、弱い隣国に対する保護国家の役割を採用し、それによって自身の大国としての地位も強化した。2013年以降、ウクライナとロシアの関係が悪化した後、ウクライナ人の大部分がEUとのより緊密な関係を結び、ロシアの影響範囲から自国を遠ざけることを望んでいた*19。近隣諸国のほとんどがすでにそうしていた。その政治的な西方への動きでロシアの指導部は明らかに友好条約を無効になったと見なし、それに伴ってブダペスト覚書も破棄されたようである。このように、ロシアの場合、国際法の非常に古い理解にとらわれているように見える。このことは、カール・シュミットの政治法思想をすぐさま連想させる。

Schmittの*Der Nomos der Erde* (大地のノモス—ヨーロッパ公法という国際法における)はもともと1950年に出版された*20。法思想の起源を扱っている。法は、土地の取得と、その後の他の当事者による買収の試みに対する防御に基づいている。土地の取得は、内部および外部の両方に対する、その後のすべての権利の基礎となる最初の法的所有権である*21。この潜在的な対立状況は、シュミットの他の有名な概念も確立する。すなわち、味方と敵(Freund und Feind)の意味は、領土の所有を征服しようとする人々に対し、ともに防御する人々の間の公の友情である。保護と服従(Schutz und Gehorsam)という概念も同じく、政治組織の公の友人の間での規律が重要で、起こりうる脅威に対する彼らの保護を可能にする。理論的には、法律も政治組織も起源は土地の所有にある。

16世紀から20世紀初頭までの約400年間、この法的思想がヨーロッパの国際法の基礎を形成していた。軍事力に基づく土地収奪の権利は、欧諸国の相互関係を確立し、世界中で大規模な植民地所有物を作り出し、同時にヨーロッパのノモスを世界的な秩序にした。カレヴィ・ホルスティが領土性と戦争の研究において、この

*18 Roshchin, Evgeny (2017) *Friendship among Nations. History of a Concept*, Manchester: Manchester University Press.

*19 Ahtamo, Valtteri (2022) Pala Ukrainasta – väkisin, mutta suostutellen, *Idäntutkimus*, vol. 29, no 1, 3–22, <https://journal.fi/idantutkimus/article/view/112036/68262>

*20 Schmitt, Carl (1997/1950) *Der Nomos der Erde im Völkerrecht des Jus Publicum Europaeum*, Berlin: Duncker & Humblot.

*21 “In Jedem falle is die Landnahme nach Innen und Aussen der erste Rechtstitel, der allem folgenden Recht zugrunde liegt.” Schmitt . p. 17

種の思考の実践をしばしば詳細に分析している*²²。第一次世界大戦後は国際連盟、第二次世界大戦後は国際連合が国際法制度の創設に着手し、強制的な土地の取得は違法となった。どちらの場合も、米国は新しいタイプの法的規則を適応しはじめ、したがって海外の土地所有権利と相互戦争の権利をヨーロッパから剥奪した。シュミットの議論の多くは、ヨーロッパの国家によって確立された法秩序を米国が破壊したプロセスの詳細な分析である。1823年のモンロードクトリンの宣言に始まり、ヨーロッパの国家は集合体としての世界的な役割を徐々に引き受けた。

ソビエト連邦は米国に対立する両方の組織に属していたため、その思想的・政治的影響力の外にあって、新しい法的慣行を採用しなかった。また、新しいシステムの採用にも反対があった。第二次世界大戦は、19世紀の領土慣行への回帰だったと考えられる。特に、ドイツ、イタリア、日本、およびソビエト連邦は、領土の取得、征服、分割、および国家の設立に従事していた。注目に値するのは、戦後、ドイツ、イタリアおよび日本は領土獲得のすべてを放棄したが、ソ連はそうではなかったことである*²³。つまり武器で征服したすべての土地を、直接ソビエトの領土として、或いは友好条約によって多かれ少なかれ支配された国家として保持した。このように、ソ連はヨーロッパのノモスの精神を直接引き継ぐことができ、その後継国であるロシアは今もその道を歩んでいる。1991年以降、交渉によって以前の土地の一部を取り戻そうと試みたロシアの隣国は、特にウラジーミル・プーチンの指導期間中に、断固たる拒否に直面した。小さな北方領土の解決を試みた日本もそうである*²⁴。

同様に、ウクライナが2014年にロシアの勢力圏を離れようとして、正当な合法的所有と見なされていた領土をロシアから奪おうとしたことは、古典的な18世紀と19世紀のタイプの直接軍事行動をロシアに促す強力な要素であったと推測できる。それは、21世紀の政治議論の言葉の下に隠れ蓑にしておき、直接には見えにくい。実際のところ、プーチン大統領は、ロシアの領土を大きく拡張したことで知られる18世紀のロシア皇帝ピョートル大帝と自分を比較している*²⁵。

*²² Holsti, Kalevi (2004) *Taming the Sovereigns. Institutional Change in International Politics*. Cambridge and New York, Cambridge University Press.

*²³ Holsti 2004, 91-92.

*²⁴ あるウェビナーで、ロシアと日本の間の交渉に参加した日本人はロシア側の議論についてこのように語った。「あの島はロシアの軍力によって取られました。返して欲しければ戦争を起こして取れば良いです!」。チャタムハウスの規則は、スピーカーの身元を明らかにすることを禁止している。

*²⁵ Roth, Andrew (2022) Putin compares himself to Peter the Great in quest to take back

これは、状況の別の重要な要素につながる。国際法構造の政治的な基盤は、大国の重要性を強調している。大国とは法規範の作成とその解釈に最大の影響力を持つ国家である。大国は最も重要な会議に参加し、外交活動の中心的な結節点となり、これらの活動への参加を通じて国際政治システムの機能を管理する。

大国の地位は、他の大国によってのみ付与される^{*26}。そして、特定の国家の能力が大幅に低下したと見なされた場合、大国がこの地位を廃止することもできる。それには問題の国家を重要な外交プロセスに招待しないだけでよい。実質的な領土獲得を含む既存の大国に対する戦争は、大国の地位への入会儀式 (Rezeptionsparti) である。同時代の人々が認識していたように、ロシア自体はピョートル大帝の勝利の戦争の後、大国になった。西ヨーロッパでは、ロシアはいまいで異教的で野蛮なアジアの国と見なされていたが、その領土拡大の大きな成果により、概念的にはヨーロッパの大国の地位に移された^{*27}。これは、世界史上の唯一の脱亜入欧の実例である。日本の歴史は違う^{*28}。

大国の地位への上昇は歴史上かなり珍しい。イタリアは、1861年に最初に単一民族国家として統一を達成し、その後1866年にオーストリア帝国との戦争に勝利した後にそれを実現した。ドイツの場合は、プロイセンが1886年にオーストリア帝国と、1870年にフランスと戦って勝利を収めた後、1871年にすべてのドイツの州を最終的に統一した。アメリカ合衆国は、最初は1823年にモンロー主義を宣言し、次に1847年にアフリカに新しいリベリア国を創設してその能力を示し、1897年にスペインと戦い、最後に第一次世界大戦に決定的な影響力を示した。日本は1895年の清帝国に勝利し、1900年の義和団反乱の鎮圧にヨーロッパ列強と共に参加、1905年にロシアを打ち負かし、大国の地位を実現した。中国は興味深い事例である。経済大国であり、ASEANの小国を相手に南シナ海で領土を拡大し、多くの国際会議に参加しているが、決定的な戦勝は少ない。1950年から1952年にかけての朝鮮半島での米国との戦争は膠着状態に終わった。1962年に確かにインドに勝利したが、インドは当時貧しい国であった。1969年のソ連との国境紛争では

Russian lands, *The Guardian*, 10 June 2022.

^{*26} Die Anerkennung als Großmacht durch eine andere Großmacht ist die höchste Form völkerrechtlicher Anerkennung. Schmitt 1997, p. 163.

^{*27} Ph. J. von Strahlenberg (1975/1730) *Das Nord und Ostliche Theil von Europa und Asia*, Studia Uralo-Altaica 8, Szeged: Attila József University, p. 227.

^{*28} Korhonen, Pekka (2014) Leaving Asia? The Meaning of Datsu-A and Japan's Modern History, アジアを去る? 脱亜の意味と日本の近代史. *The Asia-Pacific Journal*, Volume 12, Issue 9, No. 3. http://www.japanfocus.org/site/make_pdf/4083

実際の戦闘はあまり行われなかった。1979年のベトナム侵攻は、軍事的な成功とは言えなかった。したがって、厳密なシュミットの意味では、中国の大国としての地位はまだ疑わしいかもしれない。ただし、国際社会の根底にある法的哲学は変化しており*²⁹、経済力と大規模な常備軍および時折見せる近隣諸国に対する好戦的な姿勢で今日では十分かもしれない。

ロシアは経済大国ではない。主に原材料を生産する産業であり、統計的にはイタリア、またはフィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、アイスランドという小さな北欧諸国を合わせたものと同じ大きさである。その大国としての地位は、確立された大国によって公然と挑戦されたこともある。2014年の演説で、米国のオバマ大統領はロシアを「地域的な大国」であり、その「弱さ」のためだけにウクライナで軍事行動をとっていると評価した*³⁰。これは深刻なチャレンジであった。大国地位の威信自体にとって重要であるし*³¹、実際の外交政策問題への影響力の観点からも、多くのことにかかわってくる。それ以来、事実は公に強調されていないが、ロシアの地位に対する疑念は続いている。したがって、シュミットの観点から状況を考えると、ロシアの指導者は18世紀と19世紀の法的概念を使用し、ウクライナに対する支配権を失う危険にさらされており、国際社会におけるロシアの大国地位に対する懐疑を受け続けていたといえる。ロシアの指導者達にとっては、このチャレンジに応じて領土をめぐる大規模な軍事作戦を実行することが必要だったと考えられる。2022年のウクライナ攻撃はその結果であろう。

合衆国はヨーロッパのノモスを破壊し、むしろそれを独自の帝国に置き換えた。それはもはや直接的な領土所有に基づくものではなく、むしろ世界経済と政治における中心的地位に基づく構造である。そしてさまざまな形態の文化的影響力もある*³²。ロシアは、伝統的なコンキスタドール精神を維持しようとしている最後のヨーロッパのモヒカンと見なすことができるが、あまり成功していない。それで良いだろう。時代は変わっている。

*²⁹ Holsti, Kalevi (2016) *Major Texts on War, the State, Peace, and International Order*. New York: Springer, p. 50-51.

*³⁰ CNN (2014) Obama: Russia a regional power, YouTube <https://www.youtube.com/watch?v=PqQUzeZbLEs>

*³¹ Morgenthau, Hans (1978) *Politics Among Nations. The Struggle for Power and Peace*, New York, Alfred A. Knopf, pp. 77-91.

*³² Lavallé e, Marie-José e (ed.) (2022) *The End of Western Hegemonies?*, Wilmington & Malaga, Vernon Press.